

阿岐のまほろば

Vol. 38



ダムに水没する中世のムラ

と はない せき ふくとみちょうく ば
戸鼻遺跡 (福富町久芳)



写真1 調査区全景 (空中写真 北から)

戸鼻遺跡の発掘調査は沼田川^{ぬたがわ}河川総合開発事業(福富ダム)に伴って、平成19年5月から10月の6か月間実施しました。

本遺跡は東広島市福富支所から西へ約400mの福富町久芳に所在し、福富ダムの水没地内に位置しています。本遺跡は福富支所が所在する丘陵

(久芳レイクヒル) から西に延びるなだらかな尾根の先端近くに立地し、遺跡の西側には沼田川支流の押谷川が南に向かって流れています。

これまでの福富ダムの建設に関連して、金口古墳群^{かなぐち}・日曾木遺跡^{ひそぎ}・川高遺跡^{かわたか}・川高2号遺跡^{かわたか}・福原城跡^{ふくはら}の発掘調査が行われ、縄文時代から中世にか



けての遺構・遺物が検出され、当地域の原始・古代・中世の様子が徐々に明らかになってきています。

戸鼻遺跡の調査では、中世の竪穴住居状遺構 4 軒・中世の掘立柱建物跡 4 棟・中近世の性格不明遺構 3 基・縄文時代から近現代にかけての土坑 7 基・近世の道路跡 1 条などを検出しました。

竪穴住居状遺構は長さ3～6mの不整形の竪穴住居跡に似た遺構です。床面は平坦で柱穴や壁溝を伴っておらず、壁は緩やかに立ち上がっています。いずれも中世の遺物が出土しており、住居跡だとすれば中世の竪穴住居跡としては西日本では数少ない例となります。掘立柱建物跡は1×1間・1×2間・1×3間・2×3間の建物で、いずれも直径10～30cm程度の柱穴をもつものです。出土遺物から中世のものとみられます。性格不明遺構はいずれも長さ4～7m程の不整形のもので、角礫を多く含む遺構です。床面は凹凸があり、



写真3 集石遺構の作業風景

壁は緩やかに立ち上がっています。出土遺物から中世とみられます。土坑のうち、底面中央に小穴を伴う縄文時代の落とし穴と考えられるものがあります。また、縄文時代晩期の土器片を含む土坑や、古墳時代前期の土師器の破片が出土する土坑、集石を伴う中世の土坑などがあります。道路跡は調査区中央部を東西方向に走っています。道路跡の規模は、下端の幅が1.5～2 m、深さが50cm前後です。底面の一部で礫層の広がりがあり、土層断面の観察から、数回にわたって丁寧な整備が行われた様子がうかがえます。江戸時代後半頃の遺物が多く出土しており、当時この道路が頻繁に使われていたようです。

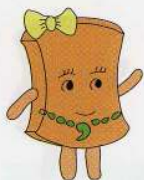
遺物は、縄文土器（深鉢・浅鉢）・土師器（甕・鼓形器台）・土師質土器（杯・皿・擂鉢・鍋・釜・甕）・瓦質土器（甕・鍋・擂鉢）・須恵器（甕）・陶磁器（碗・擂鉢・甕）・土人形・円板状土製品・剥片・砥石・鉄釘・鉄滓など縄文時代から近現代までの遺物が出土しました。

今回の調査では、縄文時代・古墳時代・中世・近世・近現代の長期にわたって断続的に営まれた集落跡を確認しました。そのなかで主な遺構は中近世に属するものであり、当時のこの地域の集落の様子をうかがう資料を得ることができました。

(唐口)



戸鼻遺跡位置図 (1:25,000, 乃美)



福富町の山城を掘る！

ほりじょうあと ふくとあちようく ぼ
堀城跡（福富町久芳）



写真1 遠景（南から）

堀城跡は東広島市役所福富支所から北へ約300mの福富町久芳に所在し、旧福富町役場などを中心とした集落の西側に位置しています。本城跡は西から延びる標高約369m、比高約15~20mの丘陵の先端に立地し、山城の東側には沼田川支流の谷河内川が流れています。発掘調査は一般国道375号道路改良事業に伴って、平成19年11月に実施しました。

調査の結果、山城跡の堀（一部）、溝状遺構1条、性格不明遺構2か所などを検出しました。堀は山城本体の西側にあり、南北方向に延びています。調査区内での高低差は約4m、山城本体までは15m離れています。堀の斜面角度は40°前後です。堀の斜面は近現代の大きな攪乱を受けていました。溝状遺構は堀に平行するように南北方向に延びており、南から北側に傾斜しています。中世の遺物が出土しており、山城に伴う可能性があります。



写真2 調査区全景（空中写真 北から）

ます。性格不明遺構は調査区北端に位置する集石を伴う遺構で、時期・性格は不明ですが、溝状遺構に伴う可能性があります。遺物は、土師質土器（杯・皿・鍋・播鉢）・輸入陶磁器（皿）・須恵器（甕）・鉄釘・鉄滓などが出土しました。

福富町内では、中世の山城は17か所で確認されています。それらの多くは郭の数が少ない小規模なものであり、それぞれ周囲の集落を支配する拠点であったと考えられます。堀城跡も同様に中世の時期に久芳の地域を支配する拠点のひとつであったとみられます。今回の調査は堀城跡に付属する堀を対象にしているため、堀城跡本体の様子は明らかではありませんが、堀城跡が使われていた時期や堀城跡周辺の様子をうかがう資料を得ることができました。

（唐口）



堀城跡位置図（1:25,000、乃美）



造果保を守る拠点

げ ぐう や ま じ ょ う あ と た か や ち ょ う ぞ う か
外宮山城跡 (高屋町造賀)

外宮山城跡は、東広島市高屋町造賀にある中世の丘城です。標高は356m、水田との比高差は15mです。調査は造賀東22号線の道路改良工事に伴って、平成19年11月～12月の2ヶ月間行われました。本城跡は南から延びる低丘陵の先端に立地し、南北に堀切を造って丘陵本体から切り離し、城を築いています。これまでの調査から、丘の最高所に一ヶ所、その周囲に数ヶ所の郭と、城の南東側に一条、北西側に二条の堀切が存在することが知られています。南東側の堀切は街道として利用されており、白市方面と西条方面の分岐点には、道標が立てられていました。

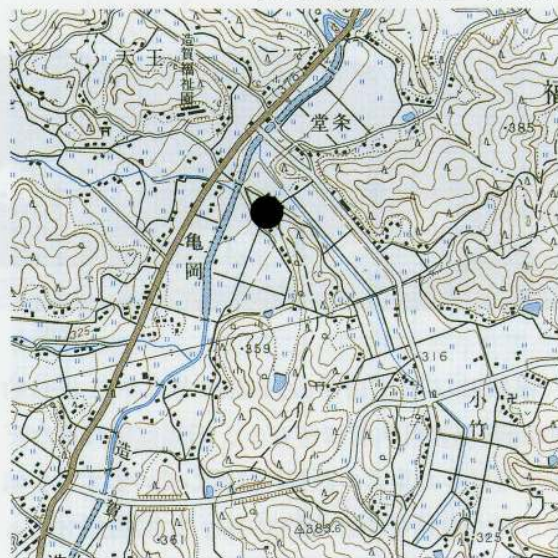
調査の結果、溝状遺構9条、性格不明遺構4基、柱穴2個を検出しました。調査区の北側で、南西から北東に延びる溝状遺構(写真1)を検出しました。その上部には多量の石を伴っていましたが、それが何のためになされたのか、わかっていません。幅は約3.5m、深さは約0.8～1.0mです。遺物は、土師質土器の鍋や皿、陶器の碗や播鉢、甕などが出土しました。



写真1 溝状遺構集石検出状況(南から)

また、調査区中央では溝状遺構SD6(写真2)を検出しました。幅は1.5～2.5m、深さは0.5～1mで、断面がV字状をしています。これは、上の郭からの排水路と考えています。この溝からは遺物は出土しませんでした。

造賀は古くは「造果保」と呼ばれ、南北朝時代



外宮山城跡位置図(1:25,000, 白市)



写真2 SD6完掘状況(東から)

の後半ごろからおおよそ百数十年間、領地をめぐる争いの絶えない地域でした。そんな状況の中で、外宮山城は領地を守る重要な拠点として、機能していたのではないのでしょうか。(増田)



(財)東広島市教育文化振興事業団 文化財センター報

阿岐のまほろば Vol. 38

発行日 2008(平成20)年7月31日

発行 財団法人東広島市教育文化振興事業団/文化財センター

編集 東広島市西条町馬木541-1

TEL 082-425-3880 〒739-0033

<http://akinomahoroba.or.jp>

印刷 大東印刷株式会社

東広島市西条下見五丁目8-17

